

専属秘書は極上CEOに囚とらわられる

こんなの、絶対に本当の自分じゃない――

日本から飛行機で約八時間の距離にあるこの南の島は、サバナ気候に属し年間の平均気温は二十八度。

けれど、さほど不快に感じないのは海からの風が暑さを和らげているからだろうか。

聞こえてくる波の音に導かれるように、佳乃は今夜はじめて会った男性に跨り、ゆったりとした笑みを浮かべた。

広げた脚の間にいる男性が、低い呻き声を上げる。硬い胸筋が上下し、割れた腹筋が薄闇の中でくつきりと浮かび上がった。

「すごい……これって、ジムで鍛えてるの？ それとも、スポーツとかで自然についた筋肉？」

佳乃は少しだけ前屈みになり、男性の腹筋を指先でなぞった。

「バスケ、やってるんだ。そのためのトレーニングでマシンも使うけどね。だから、割と柔軟だし瞬発力もあるよ。なんなら、試してみる？」

「あんっ……！ あ……っ……！」

突然の突き上げを食らって、上体が激しく揺れる。差し伸べられた両方の掌てのひらに指先さきを絡め、倒れそうになった身体を支えられた。

「君は？ 日頃身体を使って何かしてる？」
緩く腰を上下させたまま、男性が訊ねる。

「し……してな……い、あんっ……！ やあっ……ん、んっ……」
返事をしようとすると、男性の突き上げがいつそう激しくなった。

絡め合った指に力を込め、佳乃は目を閉じて思うままに腰を揺らめかせる。途端に下腹から脳天を突き抜けるみたいな快感が襲ってきて、目の前にキラキラと小さな星が舞う。

「……やっ……気持ち……いいっ……。なに……これ……あ、ああっ……！」
まるでエロティックなメリーゴーランドに乗っているみたいだ。

「もっど……お願……、もっど……あ、あっ！ ああっ……！」

目の前に降り続ける星が、時折大きな光の塊かたまりになって身体の中に溶け込んでいく。
「エロい……それに、すごく綺麗だよ。……まるで神鳥に乗って空を駆ける女神みたいだ」

まさか自分が、こんな事をするとは思ってもみなかった。
日本から遠く離れ、南国の島の熱気に晒されたせいか、心の籠かごが完全に外れてしまったみたいだ。きつとこれは、この五年間ただただ品行方正に生きてきた自分に対する、神さまからのご褒美ほうびに違いない。

そうでなければ、これほど眉目秀麗ひもくしゅうれいな男性と、こんなにも濃厚な夜を過ごしているはずがなかった。

今このときが真に南国の神々による賜物たまものだというのなら、思いっきり楽しんで我を忘れるほどの快楽たいたくに溺れても誰も文句は言わないだろう。

忘れ去っていた性的な欲求が、身体の奥からこんこんと湧き出てくる。こんな感覚に陥おとった事など、今までに一度たりともなかったのに……

佳乃が夢心地になっている間にも、男性は佳乃の乳房ちのちゆうを掌てのひらで包み込み、先端をねじるようにしていたぶつてくる。

ゆっくりと捏ね回す手つきが、たまらなく淫靡いんびだ。
「エロいって……どっちが……」

いつの間にか動きを止めた男性の腰の上で、佳乃はうっとり目を閉じてため息を吐いた。
「君だろう？ こんなにそえられる女性ははじめてだよ」

彼の手が慣れた感じで身体のあちこちを触るたびに、脚の間が新たにじんわりとぬめるのを感じた。

身体を開いたのは、はじめてじゃない。

だけど、いまだかつて自ら望んだ事はなかったし、快楽など自分には無縁のものだと思い込んでいた。

「私だって、こんなに惹きつけられる男性に会ったのは、はじめて……。ねえ、どうせなら一生忘

れられないような時間を過ごしたい。もし、今後二度と会えなくても、死ぬまで憶えていられるような快感を味わいたい……。いい？」

普段の自分なら、絶対にこんな台詞は吐かない。

今みたいな喋り方はしないし、思わせぶりの態度で男性を誘惑するような真似をしようと思った事すらなかった。

「いいよ。……ほら、こうしてじっとしているだけでも、すごく感じる。きっと俺達、身体の相性が抜群にいいんだ」

男性が鷹揚に笑うと、硬い腹筋が上下して花芽の先端に甘やかな炎が宿る。自然と声が漏れ、顎が上を向いた。

こんなのは、まったくもって予想外だ。

まさか自分が、こんなふう奔放な振る舞いをするだなんて――

今まで知らなかった自身の性癖が、ついさつき会ったばかりの男性によって暴かれてしまった。

眼下にいる男性の一部が、自分の中に入っている――そう思うだけで身体が勝手に反応する。自分がこんなにも感じる事ができるなんて知らなかった。

気分は、さしずめ物語に出てくる高級娼婦だ。

ウィットにとんだ会話とともに、見ず知らずの相手と濃厚な夜を過ごす。でも、当然お金なんかいらぬ。ほしいのは、過去を洗い流してくれるほどの強烈な記憶と、我を忘れるくらい甘やかでスリリングな一夜だ。

そう、たった一晚でいい。

たとえ一生に一度しかない天からのプレゼントであっても、所詮旅先で出会ったゆきずりの人だ。いくら相手が、驚くほど容姿端麗で身体の相性が抜群によくて、これが一夜限りの関係である事には変わらない。佳乃は偶然もたらされたアバンチュールを日本に持ち帰るほど初心じゃなかった。

「君は本当に素敵な女性だ。泣いたり笑ったり怒ったり……一緒にいてこれほど楽しいと思った女性はおはじめてだよ。外見も中身も、完全に俺の好みだ。……特に、下から見る君の胸……彫刻にして遺しておきたいほど完璧なフォルムだな」

男性の指先が佳乃の胸元を下り、花芽の先を摘まんだ。

たったそれだけの刺激に耐え切れず、佳乃はまたしても小さく声を漏らしてしまう。

「くっ……かーわいい……。ほんと、たまらない」

そう言って笑う男性の笑顔は、思いのほか優しかった。

男なんて、もうこりこり――そう思ってこんな南国の島まで逃げてきたのに、向けられる微笑みに心がとろけそうになっている。

佳乃は無意識に首を横に振った。

(ダメ……絶対にダメ……！)

これ以上、見つめ合い、言葉を交わしていると、本気で恋をしまいそう。

こうして男性と睦み合っているのは、あくまでも今宵限りの事であり、この先の未来はない。た

だのアバンチュールの相手に、身体だけならまだしも、心まで許してしまうなんて決してあつてはならない事だ。

そうならないためには、心が置き去りになるほど淫^{みだ}らに、この行為だけに溺^{おぼ}れるしかない。佳乃は揺れる気持ちを振り切るように、身を屈めて自分から彼の唇にキスをする。

そして、伸びてきた男性の腕に包み込まれながら、彼の硬く膨張する屹^{きつりつ}立をさらに奥深く自^{みずか}らの中に招き入れた。



六月最初の水曜日。

天気予報のとおり、空には今にも雨が降り出しそうな厚い曇が垂れ込めている。

「おはようございます」

都内中心部に位置するビジネス街のビルの中で、清水佳乃は居合わせた社員達に朝の挨拶をした。

「あ、清水さん。おはようございます」

「おはよう。清水さん。今にも降ってきそうな天気だね」

向けられる返事に微笑みを返しながら、佳乃はエレベーターに乗り込んで操作盤の前に立った。それと同時に、同乗した社員達が降りる階のボタンを押す。

時間は午前七時二十分。

こんな時間に出社してくる人間は、ある程度顔ぶれが決まっている。

「今日は午後から奈良に出張なんだよ。あつちは今、晴れてるよね。どうせ地下を通るし、傘は置いていって大丈夫かな」

「奈良ですか。そうですね、昨夜から降り続いていた雨は、もう止んでいるみたいです。でも、また南から雨雲が近づいてきているようですから、もし夜遅くまで外にいらっしやるなら、折り畳みの傘を持参されたほうがいいかもしれません」

「そうなの？ じゃあ、そうするか。いやあ、いつも役立つ情報をありがとう」

鏡面仕上げの壁面に映る黒髪は、ここ十年来ずっと変わらないボブスタイル。パーマやカラーリングとは無縁のせい、髪の毛はいつも艶^{つや}やかで健康的だ。

「清水さん。この間取材に来たケーブルテレビの……えーっと、誰だっけ？ 眼鏡で口元に髭^{ひげ}があるディレクター」

そう聞いてきたのは、第二営業部の主任だ。

「もしかして、笹野^{ささの}さんの事でしょうか」

「あ、そうそう笹野さんだ！ 彼と連絡を取りたいんだけど、連絡先、保管してあるかな？」

「はい。後ほど内線でお知らせしますか？」

「うん、そうしてもらえると助かる」

「清水さん、明日トミマス商事の田中^{たなか}常務を訪ねるんだが、手土産^{てみやげ}は何がいいだろう？」

「田中常務は甘党なので、烏雪堂の新作和菓子がいいかと——」

ほんのわずかな時間に、あれこれと質問を投げかけられる。佳乃はその都度的確な返答をして、このあとやるべき事を頭の中に書き留めていく。

佳乃の勤務先である「七和コーポレーション」は、日本各地に大型スーパーを展開しており、今や海外にも多く支店を置く国内小売業の最大手だ。

そこで社長秘書をしている佳乃は、現在三十二歳で独身。勤続五年目にして秘書課主任という役職についている。

身長は百六十五センチで、体重は五十三キロ。まあまあ整った目鼻立ちは、年配の人からは美人だと言ってもらえる。どちらかといえばレトロな印象の顔をあつさりメイクでカバーし、モノトーンのスーツで身を固めれば、いかにも堅そうなデキる秘書の出来上がりだ。

社内の評判は概ね良好だし、人事評価は常にAランク以上。直属の上司である村井秀一社長からの信頼も厚く、ときに秘書というよりは右腕に近い役割を担う事もある。

しかし、恋愛に関していえば、仕事で大勢の男性に関わる事はあっても、今後恋に発展しそうな気配は皆無。あえて相手を探そうという気もないし、一人きりの穏やかな生活を楽しみながら暮らしている。

今のところ、その生活を手放すつもりはないし、むしろこのまま独身を貫いたほうが幸せになれる気がする今日この頃だ。

「清水さん、朝一で副社長に伝えておきたい事があるんだけど」

佳乃の斜めうしろにいた広報部の部長が、おもむろに話しかけてきた。少々いらだっている様子からすると、あまりいい話ではないのかもしれない。

「わかりました。では、出社されたらすぐにお知らせします」

「うん、頼むよ」

広報部長が頷いた直後、エレベーターのドアが九階で開く。

降りていく彼に会釈して顔を上げる。エレベーターの中にいるのは、佳乃ただ一人だ。

ほっと一息つく暇もなく秘書課がある十二階に到着した。

降り立ったフロアはしんと静まり返っている。役員達が来るまでにはあと一時間以上あるし、おそらくこの階に勤務する者はまだ誰一人出社してきていないだろう。

佳乃はホールをさっと見回してから、自席に向かって歩き出す。

「ん？」

いったんはスルーしたものの、視線を巡らせたときにちょっとした違和感を覚えた。振り返ると、一列に並べられた観葉植物の鉢の間に、見覚えのある小瓶が置かれている。それは、佳乃が好んで買う南国の島で売られているビールの小瓶だった。

綺麗な緑色をしたそれは、専門店で見かける事はあるが、どこにでも売っているというものではない。

「え？ 何でこんなものが……」

拾い上げた瓶は、蓋が開いていて中身は空っぽだった。

いったい誰が放置したのだろうか？

佳乃は口をへの字にして考え込む。金曜日の夜にここを通ったときには、絶対になかった。そうになると、これが置かれたのは金曜日の夜遅くか、土日の間という事になる。

（残業して遅くなった人か、休日出勤した誰かが置いたのかな……。それにしても、どうして十二階に？）

このフロアは、役員の執務室と秘書課のみ。一般社員はよほどの事がない限り足を踏み入れる機会のない場所だ。十三階には展望台を兼ねたリーススペースがあるが、今は内装工事をしていて閉鎖されている。仮に間違えて十二階で降りたにせよ、オフィスにアルコールを持ち込むとは言語道断。ましてや飲んだあとの空き瓶を放置するなど、いったいどの不届き者だろうか。

（もし見つけたら、嚴重注意しなくちゃ。……って、まさか役員の中の誰かじゃないよね？）

だが、佳乃の知る限り該当しそうな役員は見当たらない。

空き瓶を片手に、佳乃はふたたび歩きはじめ。途中、給湯室に立ち寄り、空き瓶を専用のダストボックスに入れた。

（そういえば、しばらくこのビール飲んでないなあ）

自席に着いてパソコンの電源を入れると、画面いっぱいには南国の島の風景が広がる。

その写真は、五年前に佳乃がスマートフォンで撮ったものだ。せっかくだからと壁紙に設定して以来、ずっと変更しないまま今に至る。普段はすぐに必要なソフトを立ち上げるから、壁紙を見るのはほんの一瞬だけだ。

しかし今日は、あのビール瓶のせいか、つい視線が画面の青い海に吸い寄せられてしまう。

（さてと。まずはやるべき事を片付けなきゃ）

気持ちを切り替えて、画面に連絡先管理ソフトを開いた。先ほど頼まれた第二営業部の主任に内線を入れて、必要な情報を伝える。

そのあと、いつもどおりルーチン業務を終わらせ、立ち上げた画面を最小化させた。ふたたび現れた南国の風景を眺めながら、出勤途中に買ったコーヒーを一口飲む。

写真を見るうちに、頭の中に旅行に行った当時の事がぼんやりと思い浮かんできた。

（もう五年も前になるんだな……）

二口目のコーヒーを飲みつつ、佳乃は少しの間だけ過去の思い出に浸る。

そこは成田から直行便でおよそ八時間かかる南国の島だ。日本での季節は春。現地はちょうど乾季にあたり、絶好の観光シーズンだった。

当時、佳乃は二十七歳で、新卒で入社した会社を辞めたばかり。

旅の目的は、四年と少しの間、身を粉にして働いた自分へのご褒美——というのは表向きで、本当は誰も知らない国で一人きりになりたかったから。そして、一年半付き合った元カレへの感情を整理してリセットするため——

今思い出しても、心がざらついてくる。元カレは前の勤務先の上司だった。

年齢は佳乃よりも六つ年上。勤務先の創業者一族の御曹司でもある彼は、佳乃がはじめて付き合った相手だ。何もわからないまま恋人関係を続け、最後は元カレの裏切り行為で終わりを告げた。

佳乃は彼に別れを告げると同時に、逃げるように会社を退職したのだった。

その足で旅行会社へ駆け込み、ものの三十分で南国の島に向かう契約を結んだ。行き先を選ぶ決め手となったのは、パンフレットに載っていた空と海の青さだったように思う。

過去、何度か海外旅行の経験はあったものの、単独で国外に出るのはそのときがはじめてだった。それでも躊躇なく一人旅を決めたのは、それだけ切羽詰まっていたからだろう。

旅の日程は十日間。

特に何も予定を決めず、日がな一日ビーチで昼寝をしたり観光客で賑わう繁華街を歩いたりした。そして、帰国する前日、佳乃は生まれてはじめてのアバンチュールを経験したのだ。

相手は佳乃より三つも若い日本人男性で、滅多にお目にかかれないほどのイケメンだった。

(何もかもが素敵で、まるで夢みたいだったな……)

いかにも女性にモテそうな彼が、どうして自分とそんな関係になったのか、今でも不思議で仕方がない。むしろ、そんな関係はその場限りのものだし、帰国した当初は早く忘れてしまおうと躍起になっていた。

だけど、どれほど努力しても思い出は一向に消えず、事あるごとに蘇ってきては、よりいっそう鮮明な記憶として頭の中に刷り込まれる。どうしようもなくなった佳乃は、大学時代からの親友である水沢真奈に洗いざらいぜんぶぶちまけてみた。けれど、かえって記憶がくつきりと脳に刻み込まれ、逆効果になってしまった。

結局、時間が流れるに任せているうちに、あつという間に五年の月日が流れ、今に至っている。

時間にすれば、ほんの十時間ほどの出来事にすぎない。それなのに、どうしてこうも忘れられず記憶を辿り続けてしまうのだろうか……

(……って、やめやめ!)

佳乃は頭の中に広がりそうになっていた映像をかき消し、ぬるくなったコーヒーを一気に飲み干した。そして、ソフトを立ち上げて今日一日のスケジュールを確認する。

その間に、次々と秘書課の社員が入社してきた。

現在、秘書課社員は佳乃の他に男性の課長と女性社員が四人。課長を除くと、全員が年下の後輩であり直属の部下となる。

「清水主任、これなんですけど——」

隣席に座る岡が書類を示しながら質問をしてきた。三年前、新卒で入社してきた彼女は、几帳面でどちらかといえば大人しい性格をしている。人柄もよく、仲のいい同期社員も多くいるみたいだ。一方、中途採用である佳乃には、同期はいない。入社して五年経った今でもランチタイムはだいたい一人だし、アフターファイブを共有するほど親しくしている同僚もいなかった。

仕事の事を考えれば、もっと自分からコミュニケーションをとって和気藹々とした秘書課を目指したほうがいいのかもしれない。

けれど今は、ある問題からそうするのは得策ではないと思っていた。

秘書課の課長である丸越が出動してきたので、頼まれていた書類を渡しに行く。

「ありがとう。相変わらず仕事が速いね。えっと、今日は特にスケジュールの変更はなかったか

な？」

「はい、変更ありません」

「OK」

丸越が親指と人差し指で丸を作った。現在五十五歳の彼は、年齢よりもかなり若く見える。だからというわけではないが、今ひとつ貫禄に欠ける印象があった。

席に戻り、かかつてきた内線に対応をしているうちに八時半の始業時間を迎えた。パソコンでメールソフトを立ち上げ、受信ボックスを開く。佳乃が現在管理しているアドレスはふたつある。そのうちのひとつは自分自身のもの。もうひとつは、社長である村井のものだ。

社長秘書である佳乃は、本来なら朝一番に村井の執務室に出向き、一日のスケジュールを確認する。しかし、彼は先月末にかねてから経過観察をしていた脳の血管狭窄の悪化のため、都内大学病院で入院加療中だ。入院期間は三カ月の予定で、その間に送られてくる村井宛の書類やメールは、彼から直々に委託された佳乃が開封し確認する事になっている。もともと主任として秘書課全体の統括も任されていた事もあり、このところ仕事の忙しさに拍車がかかっていた。社長不在の今、佳乃が担当する業務も一時的にとはいえ大きく変化している。

一秘書である佳乃が、どうしてそこまで――

そう思われても不思議ではないが、それにはふたつ理由があった。

ひとつは、佳乃がそれだけ村井から信頼されているから。

もうひとつは、副社長の高石恵三を筆頭とする「高石派」と呼ばれる派閥に、トップの不在中、

勝手な振る舞いをさせないためだ。

高石派がココソと何か企んでいるらしい――

そういった話が漏れ聞こえてくるようになり、必然的にできたのが「村井派」と呼ばれる現社長の派閥だ。会社を二分しかねない今の状態になったのは、佳乃が入社する何年も前の話だと聞く。

一秘書である佳乃にはどうしようもない事であり、憂えてもふたつの派閥が相容れる要素などないように思える。

救いがあるとすれば、これまで何かあっても、相容れないなりに均衡を保ちつつ、さざ波程度の争いで済んでいる事だ。

その均衡が今、村井の不在により崩れようとしている。

高石はこことばかりに村井派の人間に接触を持つようとしているし、実際に彼に懐柔されそうな人間が何人か出ていた。穏健派で物事を長い目で見るというスタンスをとっている村井に対し、高石は強硬派で迅速な利益追求を重視しがちだ。

佳乃自身、担当である以上どうしても村井サイドの人間にならざるを得ないし、もし仮に今の立場でなくても同様の姿勢をとっていると思う。それだけ彼の事を信頼しているし、転職してはじめてのボスが村井でよかつたと思つた事は一度や二度ではない。

そんな事もあり、佳乃は少しでも高石におかしなところがあれば、すぐに報告できるよう準備している。できれば入院中の村井を煩わせないが、高石がそのまま大人しく社長の帰りを待っているとは思えない……

「じゃあ、僕はこのあと人事部に行つて、本城代表をお迎えする準備をしてくるから」

丸越が席を立ち、いそいそとエレベーターホールのように歩いていく。

『本城代表』とは、今日から新しく「七和コーポレーション」のCEOに就任する人物だ。

本城敦彦あつひこというその男性は現在、二十九歳。高校卒業後渡米し、世界最高ランクの大学を経て同国のメガバンクに入社を果たす。そこで、経営戦略において多大な功績を上げるなどの実績を残したあと、退職。自身で経営コンサルティング会社を設立すると、瞬またたく間に目覚ましい実績を上げて莫大な財を築きあげた。その経営手腕たるや、名だたる経済学者も舌を巻くほど見事なものであるらしい。

若くして国内最大級の企業の最高経営責任者になる彼は、代表取締役も兼ねる。つまり、社長を除くもう一人の会社代表であり取締役副社長である高石よりも権力を持つ。

『本城君は信頼に値する男だ』

村井にそう言わしめた本城とは、共通の知人を介して知り合い、意気投合したのだと聞く。ビジネスにおいては、性別や年齢差など関係ないし、村井の人を見る能力は確かだ。

本城がどんな人物であろうと、仕事さえできれば文句などない。

ただ、不思議に思うのは、本城が出社するまで彼自身の顔写真や住所などの個人情報は一切明らかにされていない事だ。

もっとも、事前にそれらを明かしてしまうと、就任前に彼に接触を持つとすると者が出ないとも限らない。

ネットの検索で顔写真くらいヒットするかと思つたが、一件もヒットしなかつた。高石派への対策なのかもしれないが、そこまで大がかりな事ができるのだろうか。

今風のイケメン？ それとも、強面かむもての体育会系だろうか？

(ま、どっちみち私には関係ないけど)

要は、自社にとって有益であるかどうかだ。

(社長が入院してすぐに就任とか、ほんとタイミングがよくて助かつたかも。これで、多少なりとも高石派の増長は抑えられるはず……)

そんな事を思いながら、手際よく目の前の仕事をこなしていく。気がつけば、もう十時半になっていた。本城の出社予定時間は午前十一時のはずだ。

佳乃はキーボードを叩く指を止めて、席を立つた。秘書課を囲むパーティションの外へ出て、役員室が並ぶ方向へ進む。

廊下右手奥が社長の執務室。その正面の部屋を本城に使つてもらう事になっている。

佳乃は本城の執務室に入った。彼を迎え入れる準備はすでに整っているが、念のため最終チェックをしておこうと思つただ。

(机周り、よし。窓、よし。観葉植物もよし……と)

部屋をぐるりと歩き回り、ついでにガラスに映つた自分自身の身だしなみをチェックする。

「自分、よし」

小さく呟いたとき、廊下の向こうからエレベーターの到着を知らせる電子音が聞こえてきた。無

意識に耳をそばだけると、役員のものではない若くはつらつとした男性の声が聞こえてくる。

「案内ご苦労さま。もう仕事に戻っていいよ」

声の主は、大股でこちらに近づいてきている。

エレベーターホールから今いる部屋まで、男性の歩幅でおよそ二十歩の距離だ。
(もしや、本城代表がいらつしやったんじゃ……)

佳乃は急ぎドアの近くまで駆け寄り、一歩外に出てかしまった。そして、こちらに向かつて歩いてくる男性を見た途端、驚きのあまり石のように固まってしまう。

(まさか……嘘でしょ?)

目の前の現実を受け止めきれずに、脳が拒否反応を起こしている。そうしている間に、男性は佳乃のほうに近づいてきて、ほんの一メートル先で立ち止まった。

「やあ、お出迎えありがとう。本城です。君が社長秘書の清水佳乃さんかな？」

上質で力強いテノールの声が、佳乃に向けて発せられる。

「は……はい、そうです」

まるで、頭の中をジャンボジェット飛行機が通り過ぎていくみたいだった。目の前に見える形のいい唇が、何か話している。しかし、何を言っているのかまるで耳に入ってこない。

佳乃は我が目を疑い、今一度男性を見返してみた。しかし、何度見ても目の前に突きつけられた現実が変わらない。

今、目の前にいる男性こそ、佳乃が五年前に南国の島で一夜をともにした相手に違いなかった。

——キーン……

頭の中に飛行機が発する高周波音が響き渡っている。できる事なら、この場から逃げ出してしまいたい。どんなベテランの秘書でも、こんな不測の事態には対応しきれないのではないだろうか。

「——じゃあ、行こうか」

「はっ? い、行くってどこへですか?」

うっかり、思った事をそのまま口に出してしまった。秘書としてマヌケすぎる発言を悔いたところで、あとの祭だ。鷹揚に微笑んだ本城が、片方の眉尻を上げる。

「役員の方々に、ひと言ご挨拶したい。まだ新しい職場に不慣れだから、案内を頼めるかな?」

啞然として動けずにいる佳乃を見つめながら、本城が微かに首を傾げた。確かに見覚えのあるしぐさに、心がくじけそうになる。しかし、秘書課主任のプライドにかけて、今ここにある危機を回避しなければならぬ。

「は……はい、かしこまりました。では、こちらへ」

破裂しそうになる心臓を押さえながら、佳乃はなんとか平静を装って歩き出す。

そして、本城の進行の邪魔にならないよう気を配りながら、在室中の役員の部屋を回った。

(落ちて着いて、佳乃……。とりあえず今を乗り切らないと)

五年前、南国の島で見た彼は、見るからに軟派そうな微笑みを浮かべ、不遜なほどセクシーなオーラを振りまいていた。

しかし、目の前にいる彼は、いかにも紳士然としており、整った顔立ちにクールな雰囲気をも

とっている。佳乃は目前を歩く本城のうしろ姿を見つめた。

(雰囲気がぜんぜん違う。もしかして双子？ なんなら三つ子とか、いっそ五つ子とか——)

考えが突拍子もないほうに流れていきそうになり、佳乃はあわてて自分を叱咤する。いくら心が乱れているとはいえ、ここはオフィスであり今は就業時間内だ。

役員室に通り顔を出し終えると、ようやく本来の顔合わせの時間になった。

集まってくる各部署の部課長達は、もれなく若き代表取締役を見て驚きの表情を浮かべる。

本城は大会議室に集まった社員達を前に、堂々たる風格を見せて就任の挨拶をした。

その間の佳乃はと言えば、相変わらず心の中に嵐が吹き荒れており、彼の言葉を聞きながら平静を装っているのがやっとだ。

佳乃は部屋の隅に立ち、壇上に立つ本城を凝視した。

どう見ても五年前に会った男性と同一人物だ。しかし、そう断言するには相手の反応が薄すぎるような気もする。

(もしかして、私の事を憶えてない……？ もう五年も前の事だし、多少は顔立ちも変わっているはず……。それに、あれだけのイケメンだもの。この五年の間にたくさん女性の相手をしてきたよね)

きつとそうだ。自分はそんな女性達の中の一人にすぎない。それに、一緒にいたのは半日にも満たないほんのわずかな時間だ。

頭の中に、希望的観測がムクムクと広がります。

(ああ、お願い！ 私の事なんか綺麗さっぱり忘れていきますように！)

佳乃は壇上に向かって、精一杯の念を飛ばした。到底効果があるとは思えないが、今の佳乃はまさに驚にもする思いでいるのだ。

顔合わせのあと、本城は各部署の部長らと個々に挨拶を交わし、社内を見て回るべく彼らを引き連れてエレベーターホールに向かう。

先行した佳乃は、やってきた無人のエレベーターに乗り込んで操作盤の前に陣取る。本城は周囲と雑談を交わしながら、悠然と中に乗り込んで佳乃の背後に立った。

心なしか、後頭部にもすごく強い視線を感じる。面と向かっているわけではないのに、これほどの威圧感を与えられるなんて……

目的の階に到着し、エレベーターのドアが開いた。

身を硬くして操作盤を凝視していた佳乃は、部課長達が順次フロアに出ていくのを見守る。最後まで残っていた本城が、ドアの外に一步足を踏み出す。

(とりあえずお役御免——)

佳乃が、ほっと胸を撫で下ろそうとしたとき、本城がふいに佳乃のほうを振り返り、他の誰にも聞こえないような声で言葉を発した。

「騎乗位——」

(えっ……？)

佳乃は、はっとして本城の顔を見つめた。

その顔に浮かんでいるのは、さつきとは打って変わった不遜なほどセクシーな微笑み。佳乃の頭の中に、南国の島で過ごした最後の夜が思い出される。今、目の前にいる本城の瞳と、あの夜ベッドで睦み合った年下男のそれが完全に一致した。

彼はすべてを憶えている！

そう確信した佳乃は、遠ざかる背中を呆然と見送りながら、抱いていた希望をすべて手放し絶望した。

その日一日の仕事を終え、佳乃はいつもどおり電車を乗りついで自宅に帰り着いた。

気分はどんよりと落ち込んでいるし、叫び出したいのを我慢し続けていたせいで神経がこれ以上ないほどすり減っている。

本当にわけがわからない。

いったいなぜ、今頃になってあのかの彼が目の前に現れたのか――

しかも、自分の勤務先のCEO兼代表取締役として、だ。

こんな最悪の巡り合わせがあるだろうか？

玄関の鍵を開けながら、佳乃は最後に見た本城の顔を思い出す。

あの顔は、きつと何か企んでいるに違いない。そう思うと、人生初の一大事にして最大の危機の真つただ中に放り出された気分になった。

「あああああ〜！ なんて!? どうしてなの？」

家に入り、履いていたパンプスを蹴り飛ばす勢いで式台上がる。廊下を進もうとして、上がり框に思いつきつま先をぶつけた。

「いったあ……い……」

あまりの痛みに、廊下に倒れ込んで転げ回る。

こんな姿、絶対に会社の人達には見せられない。日頃、完璧な秘書というイメージをまとっている佳乃だが、プライベートはまるで違う。

実際、家では真逆と言っているほど気を抜いて過ごしていた。

ようやく痛みがとおり過ぎ、佳乃はのろのろと起き上がる。そして、ため息を吐きながら居間のちゃぶ台の前でへたり込んだ。

「もう、何なのよ……。私が何をしたっていうのよ〜」

不平不満を漏らしても、何の解決にもならない事はわかっている。だけど、そうせずにはいられないほど心身ともにダメージを受けていた。

じっとしていられず、立ち上がって庭を囲む縁側をうろろと歩き回る。

佳乃が住んでいるのは、都内下町にある築七十数年の一軒家。

持ち主は母方の叔父で、夫婦が十年前に海外に移住したのを機に佳乃が移り住んだ。

あれこれと使い勝手は悪いものの、住み心地は悪くはない。今は毎月気持ちばかりの家賃を払っているが、叔父さえよければここを買い上げて終の棲家にしようかと思いはじめてるところだ。

「いったいどうすればいいの？ まずい……いろいろとヤバすぎるでしょ」

頭の中に、スーツ姿の本城が思い浮かぶ。

彼は事前に聞いていた経歴にふさわしい外見をしていたし、顔を合わせた者を一瞬で懐柔^{かいじゆう}してしまっただけ強烈なオーラを放っていた。

彼は渡米して大学に通っている間に、主だった経済関係の資格を取得した上にインターネット関連の起業まで果たしている。のちにそれを売却したときに得た金額は、日本円にして十億はくだらなかつたと聞く。

そんな名実ともに超一流のビジネスマンである彼が、なぜ今になって佳乃の前に現れたのだろう。彼は「七和コーポレーション」に佳乃がいると知った上でやって来たのか。

そうだとしたら、いったいいつのタイミングでそれを知ったのか。

それとも、それはただ単に偶然的巡り合わせだったのか。

(……偶然に決まってるよね？ だって、もう五年前の話だし……)

うろろうしながら考え込んだ末に、佳乃はそう結論を出した。

恐らく本城は意図的に佳乃の前に現れたわけではなく、あくまでもビジネスとして「七和コーポレーション」の要職に就く事になっただけだ。

そして、思いがけず五年前にベッドをともした相手と再会した。きつと、それまで佳乃の事など綺麗さっぱり忘れていたに違いない。

いい加減歩き疲れ、佳乃は居間の壁にもたれかかるようにして座り込んだ。

いつもなら、家に帰り着くなりリラックスし、すぐにゆるゆるのプライベートモードに入る。だ

けど、今日に限っては心の中に大型の台風が吹き荒れている感じた。

本城が去り際に言った言葉を思い返すたびに、どうの昔に忘れ去ったはずの思い出がありありと蘇^{よみがえ}ってくる。

再会の理由はさておき、五年前に彼とただならぬ仲になったのは事実だ。
「ああ……もう、最悪……」

今後は会社のトップに就いた彼のもとで、勤務を続けなければならない。仕事をする上で彼に從う事には何ら不満はなかつた。

問題は、本城が佳乃との過去をどう思っているかなのだ。

もし彼が二人の間に起こった出来事を、会社の誰かしらに漏らしたとしたら——
その可能性を考えただけで、全身が縮み上がって息苦しくなってくる。

この世に生を受けて三十二年。今までコツコツと積み上げてきたものが、たった一度の過^{あやま}ちのせいで崩壊するかもしれない。佳乃は畳の上に仰向けになって倒れた。

そして、本城とはじめて会ったときの事を思い出す——

事の発端^{はつたん}は、五年前に行った南国の島で起きた出来事だった。

十日間の旅を締めくくる最後の夜。

佳乃は一人、ビーチサイドで沈みゆく夕日を見ながらたそがれていた。

南国の空や海は素敵だし、出会った現地の人々は皆幸せそうに暮らしている。それらを見ているだけで晴れやかな気分になるし、知らず知らずのうちに溜め込んでいたストレスも発散できたよう

な気がしていた。

だけど、夜になって広々としたベッドに一人眠るときや、こうして一人ぼっちで何もせずにいるときなど、ふととても寂寥感に囚われて泣きそうになる。

わざわざ遠い異国の地までやってきて、自身の心の奥底に隠れていた孤独に気づくなんて。(帰りたい……)

こんな気持ちになるくらいなら、旅行なんかやめて自宅にこもっていればよかった。

そんな事を思いながら海を見続けていたら、現地の若い女性二人に声をかけられた。

言葉が通じないながら身振り手振りで話すうち、一緒に近くのレストランで食事をする事になり、連れ立って店に向かったのが午後五時頃だっただろうか。

そのときの自分は、寂しさのあまり著しく危機管理能力が低下していたのだと思う。

相手が女性だったから油断していたのもあった。だけど、一緒に歩くうちに何となく違和感を覚えはじめる。しかし、適当な理由を作って帰ろうと思ったときには、現地の人しか利用しないようなレストランの二階に連れ込まれてしまっていた。

しかも、席についてしばらくすると、座っていたボックス席に男性が三人合流してきた。現地の言葉で話しかけられ、こちらがわからないのをいい事に明らかに度数の高いアルコールを注文され、一気飲みを促される。

必死に断るも、執拗に言い寄られて困惑が恐怖に変わった。そんなとき、ふらりと近寄ってきて佳乃を救い出してくれたのが本城だった。

『ごめん。この子、俺の彼女なんだ』

こんがりと焼けた小麦色の肌、よれよれのTシャツとサーフパンツ。

なにより驚いたのは、彼が思わず見とれてしまうほどの容姿をしていたという事。くつきりとした目鼻立ちに、完璧な口元。おまけに、一流のモデルばりにスタイルがよく、一見ただだけで身長が百八十センチを優に超えているのがわかった。

くしゃくしゃに伸びた前髪を指先でかき上げ、微笑みながら言った日本語が彼らに通じたとは思わない。けれど、彼が放つ強烈なオーラが、一瞬にしてその場にいた者を掌握してしまったみたいだ。

大声を上げるわけでも、下手に出るわけでもない。本城がにこやかに話しかけるうちに、彼らはもの見事に抑圧され、あっさりと佳乃を解放したのだった。

去っていく彼らの顔が、一様に蛇に睨まれた蛙みたいだった事を今でもよく覚えている。

佳乃は彼に何度も助けてくれたお礼を言い、せめてもの気持ちとして彼に夕食を奢る事にした。イケメンでモテ男のオーラ全開の本城を前に、最初はひどく気後れをして上手く喋れなかったように思う。けれど、彼は思いのほか気さくで、その上話し上手の聞き上手だった。

少々アルコールが入っていたせいもあり、佳乃は問われるまま自分がなぜ一人ぼっちで南国の島に来たかを話しはじめた。

話すうちについ感情が高ぶってしまい、彼の前で大泣きするという醜態を晒してしまったのは、今思い返してみても顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

けれど、結局はそれをきつかけに一気に距離が縮まり、慰められつつどちらからともなくキスを
して、お互いの身体にきつく腕を回していた。

それはごく自然な流れだったように思う。

決して、どちらかが無理にそうしたわけではないし、彼の宿泊先に行くことと決めたのも自分だ。

でも、ともに夜を過ごすにあたり、佳乃はひとつだけ彼に条件を出した。

それは、お互いに名前や素性を明かさない事——

不思議がる本城に、佳乃はせめて朝が来るまではそうしてほしいと頼んだ。

話をする中で、お互いの年齢だけはわかっていた。しかし、それ以上の事は知りたくなかったし、
聞こうとも思わなかった。なぜかと言えば、彼の事を知れば知るほど記憶に残るし、そのせいで離
れがたく思ってしまうのを避けたかったからだ。

『秘密主義者なのか？』

本城はそう言って佳乃をからかい、面白がつてわざと自分の名前を告げようとした。

佳乃はそのたびに彼の唇をキスで塞ぎ、なおも言おうとする本城の上に跨り淫らな行為に及んだ。

あのときは、自分でも信じられないほど奔放な振舞いをした。本城との行為で生まれてはじめ
ての絶頂を迎え、あとはもう我を忘れて彼の腕の中で乱れたのだ。

一晩のうちに、いったい何度彼とキスをし、身体を交わらせただろうか。

『もうこんなに親密な関係になっているのに、まだ名前を教えられない？』
行為の合間の小休止に、彼に訊ねられた。

『俺が信用できない？』

そう問われたとき、佳乃は返事に窮してしまった。

『そうじゃないの。——そういうわけじゃないんだけど……ただ、もう少しだけ時間がほしいか
なっ……』

もともと男性に対する警戒心は強いほうだし、元カレの件をきつかけに男性不信ぽくなっていた
のも事実だ。

それなのに、思いがけず本城と出会い、本来の自分ではありえない経験をしている。

性的な享楽を味わっている今だけではなく、それ以外のときにも彼はたたくさんの甘い言葉をかけ
てくれた。けれど佳乃は、それらを真に受けるほど初心でも世間知らずでもなかった。

所詮、旅先でのアバンチュール。しかも、相手は三つも年下の超絶イケメン。

『明日の朝起きたら、ぜんぶ言うって約束する。だから、今夜だけはお互いに何も知らない者同
士って事にして』

それは完全にその場しのぎの言葉だった。

すでに佳乃は、次の日の朝、彼が起きる前にいなくなろうと心に決めていたのだ。

今思えば、よくもそんな嘘を吐けたものだと思う。どう考えても彼に対して不誠実だったし、た
とえどんな理由があろうと嘘は嘘だ。

しかし、いかにも女性の扱いに慣れた様子の彼が、ごく普通の容姿で三つも年上の自分と本気で
付き合いたいなどと思うはずがない。

彼の甘い言葉に心がとろかされる一方で、警戒心が高まっていったのは過去の恋愛で傷つきすぎているせいだろう。

彼と一緒にいたいと思う気持ちと、今がずっと続かないという事実。彼との関係を終わらせたくないという本音と、アバンチュールと割り切って関係を断ち切ろうとする決意。相容れないふたつの気持ちだが、そんな不実な言い逃れをさせたのかもしれない。

夜更け過ぎまで抱き合い、疲れ果てて本城が眠ってしまったあとも、佳乃はまんじりともせず一人悶々と考え続けていた。

「いったい、自分はもうどうしたらいいのか……」

本城と過ごしているうちに、どんどん彼に惹かれていく自分に気づいていた。けれど、どう考えても旅先で出会った年下のイケメンとの未来などありはしない。

結局、佳乃は予定どおり、まだ日が昇る前にベッドから抜け出した。そして、ぐっすり眠る本城を残して自分の宿泊先に戻り、そのまま帰国の途についてしまったのだ。

頭の中に、あの夜に見た彼の寝顔が思い浮かぶ。

「嘘、ついちゃったんだよね私……」

両親や祖父母から厳しく教えられていたという事もあり、佳乃は子供の頃から嘘だけは吐かないよう心掛けてきた。もちろん社会人になった今は、仕事をする上で便宜的に嘘を吐く事はある。でも、それにすら多少の罪悪感を持ってしまふのだ。

『嘘をつくと閻魔さまに舌を抜かれちゃうよ』

昔よく祖母が言っていた言葉に続いて、幼い頃よく口ずさんでいたわらべ歌が頭の中に蘇よみがえってくる。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます、か……」

五年前に吐いた嘘だ。

謝罪しようにも、今さらどんな顔をして謝ればいいのかだろうか？

誠意をもって「ごめんなさい」と言えば、許されるだろうか？

いや、許されるはずがない。

五年間も放置してたくせに、どの面下おもてげてごめんなさい、だ。

（どっちみち、遅すぎるよね……）

いずれにせよ、本城は過去の出来事を佳乃の鼻先に突き付けてきた。

そうでなければ、あんな捨て台詞ざりごを残したりはしないだろう。

佳乃は畳の上からのろろと起き上がり、ちゃぶ台に頬杖をつく。

とりあえず、なるべく彼に近づかない事だ。

仕事上、完全に接触を断つ事は不可能に近い。

本城が佳乃との過去をどう扱うつもりかわからないが、彼は超一流のビジネスマンであり、そういう人物は、決して軽はずみな言動はとらない——と、思ったかった。

いずれにせよ、油断してはいけない。

今後の展開がどうなろうと、取り乱さずに対処できるように心構えだけはしておいたほうがいいだ

ろう。佳乃は、そう自分に言い聞かせながら姿勢を正した。
そして、本城とは二度と個人的な接触を持つまいと心に誓うのだった。

熟睡できないまま朝を迎え、出勤の準備に取りかかる。
佳乃の朝は早い。遅くとも午前六時には目を覚まし、スマートフォンアプリで今日の天気と気温を確認する。

居間に続く縁側を歩きながら、ふと庭に咲いている紫陽花あじさいに視線を向けた。
(もう梅雨入りしたんだっとな……。ジメジメ気分を一新するためにも、今年こそ布団を買い替えよう。いいかげん圧迫死しちゃうそうだし)

ここ何年か使ってきたのは、昔ながらの綿布団だ。レトロな柄を気に入っているし、温かくていいのだが、如何せんずっしりと重くて容易に寝返りも打てない。

(だから、あんなおかしな夢を見たのかも……)

ウトウトとまどろんでいる最中に、人の大きさほどもある緑色のビール瓶にのしかかられる夢を見た。あろう事か、瓶には本城が跨またかっており、苦しがる佳乃を見下ろしながら鷹揚わづらに微笑んでいた。驚いて飛び起きた佳乃は、エレベーターホールに置かれていたビール瓶の事を思い出す。そして、あれを置いたのは本城に違いないと確信したのだ。

「ふあああ……」

寝不足のせいで、ひっきりなしに欠伸が出る。

台所に行き、いつもよりも濃いめのコーヒーを淹いれた。十二畳ある居間に入り、ちゃぶ台の隅に置きっぱなしにしているノートパソコンを開く。すると、一気に脳内が仕事モードに切り替わった。まだ自宅にいるとはいえ、佳乃の秘書としてのルーチンワークはすではじまっているのだ。いつもなら主要新聞のネットニュースをチェックし、必要と思われる記事を閲覧する。しかし、今日に限っては、それを後回しにして主だった企業の人事ニュースを開く。

「あつた……『七和コーポレーション』CEOに本城敦彦氏。米国名門大学院修了。東京都出身。二十九歳——」

前もって取材の予定が組まれていたらしく、本城は昨日の午後大手経済新聞社の取材を受けていた。記事に添付されている彼の写真は、驚くほどイケメンに写っている。

図らずも胸の奥がじんわりと熱くなり、佳乃はあわてて写真から目を逸そらした。

(は？ 今の反応は何？ ……まさか私……いや、ない！ っていうか、あっちゃダメでしょ！)

佳乃は、とっさに自分を戒いまめ、冷静になるべく深呼吸をする。過去は過去として、すっぱり切り離して考えなければ、馬鹿を見るのは自分自身だ。

佳乃は唇をきつく結び、ふたたび記事を読み進めた。

「——米国公認会計士、公認内部監査人資格取得……。起業したコンサルティング会社で得た利益の大半を世界各国のNPOなどに寄付。自らも発展途上国に向き、現地に学校や病院を設立するなど、慈善事業にも積極的……。へえ、そうなんだ……」

本城敦彦は、成功した起業家であるばかりか、本物の慈善家でもあるらしい。

いつもなら坦々と進む朝の時間なのに、今日に限っては胸の中がざわついて仕方なかった。
「ああ……もう、ほんと勘弁して！」

昨日から、いろいろと調子が狂いすぎている。その原因は明らかに本城だし、彼のせいでこんなにも心を乱している自分を、我ながら不甲斐ないと思う。

佳乃は視線だけ動かして、パソコンの画面に表示された本城の写真を見た。

濃紺のスーツに同系色のネクタイを締めている彼は、五年前に見たときよりも格段に男振りが上がっている。もともとあつた目力は、さらにパワーアップしているし、きちんとした格好をしているも体格のよさは相変わらずだ。

なんだかんと言つて、五年経つた今もまったく忘れられていない。本城本人の事はもとより、彼とともに眺めた南国の夕日の色や、彼がどんなふうに関心したのかも――

「わあああああ！ わ、わ、私つたら、何を懐かしく思い出しちゃってんのよ！」

いつの間にか閉じていた目をカッと開けると、佳乃は弾かれたように座布団から立ち上がった。用意した朝食をそそくさと平らげ、無心を心掛けながら出勤の準備を済ませ玄関を出る。

そして、自宅から自席に着くまでの間、これ以上余計な事を考えなくて済むよう、ずっと頭の中で一人しりとりを続けたのだった。

始業時間を迎え、その日のスケジュールを確認したあと、パソコンを開けて会員制のビジネスデータベースにアクセスする。

数ある新聞や雑誌記事はもとより国内外の企業情報を集積したそれは、役員のみならず彼らをサポートする秘書にとつても欠かせないツールだ。

（あ、タタラ物産の副社長がヘッドハンティングされたって噂、本当だったんだ……。森本本舗、七年ぶりの赤字転落、か……）

新しい情報を脳内にインプットしつつ、朝一で配信された記事をチェックして業界や市場関係の記事を閲覧する。中でも重要と思われるものを選び出し、自分用に保存した。

一通り朝のルーチン業務を終えると同時に、内線電話が鳴った。時計を見ると、始業時間ジャストだ。

「はい、清水です」

『ああ、清水さん、おはよう。本城だけど、ちょっと執務室まで来てもらってもいいかな？』
彼の声を聞いた途端、受話器を持つ手がわずかに震えた。

自身の過剰反応に戸惑いつつ、佳乃は自分に秘書としての立場を貫くよう言い聞かせる。

「おはようございます。わかりました。すぐに伺います」

即答し、小さく深呼吸をしながら席を立つ。隣席の岡に一声かけ、佳乃は本城の執務室に向かった。

過去の出来事について何か言われるのだろうか。さすがに、昔話を盾に何かされたりとかはないと思いたい。しかし内容が内容だけに、彼の出方がはっきりするまで油断はできなかつた。

「失礼します」

ドアをノックして中に入ると、そこには先客がいた。

「ん？ ……ああ、清水さんか」

来たばかりなのか、副社長の高石がデスクの前に立ったまま佳乃のほうを振り返ってきた。

「副社長。おはようございます」

高石が小さく頷き、またすぐに正面を向く。

その隣には、彼の秘書であり実の娘でもある高石舞が立っていた。一呼吸置いて振り返った舞が、佳乃を見て軽く会釈をする。佳乃はそれに応えて、二人の斜めうしろに控えた。

小顔ではつきりとした顔立ちをした舞は、自他ともに認める今時の美人だ。彼女は、現在入社三年目の二十五歳。入社後すぐ秘書課に配属され、父親である副社長の秘書になった。

朝、秘書課に彼女の姿が見えなかったのは、出勤後そのまま副社長の執務室へ出向いたからだろう。

「やあ、清水さん。君を呼んですぐに副社長がお見えになってね。でも、ちょうどよかった。実は昨日、村井社長のところにお見舞いに行かせてもらったんだ」

本城はデスクの椅子からおもむろに立ち上がり、高石を四人用の応接セットのほうへ誘導する。

高石はちらりと舞のほうを見て、ソファに座った。その横に舞が座り、本城に手招きされた佳乃は、必然的に彼の隣に腰を下ろす。

「社長は思ったよりお元気そうでしたよ」

「そうですか。それはなにより」

佳乃自身、症状が落ち着いてきた村井の病室を週に一度は必ず訪れている。先週は二度面会に行ったが、確かにずいぶん顔色がよくなってきていた。

「そのときに少し話をさせてもらって、もう社長の了承は得であるんだが……清水さん、君は今日から僕の秘書になってもらう」

隣にいる本城が、身体ごと佳乃のほうを向いた。思いがけない彼の言葉に、佳乃は少なからず驚いて表情を硬くする。彼は口元に穏やかな微笑みを浮かべているが、その視線は佳乃の心の奥まで見透かそうとしているほど強い。

「えっ？ いや、しかし、先ほども言ったとおり、本城代表の秘書には、ここにいる高石舞さんが適任だと思いますよ」

先に声を上げたのは、佳乃ではなく高石だった。

「清水さんは、ただでさえ社長不在で忙しいですね。それに、主任として秘書課全体の統括も任されている事ですし——」

「確かに清水さんは、両手に余るほどの仕事を抱えているのかもしれませんが。しかし、彼女の秘書としての能力は非常に高いと社長から聞かされています。それに、高石さんは現在副社長の秘書を担当していますよね」

本城の視線が、佳乃から高石へ移った。

直前まで舞に何やら目配せをしていた高石は、本城と目が合った途端あからさまに渋い表情を浮かべる。隣でかしくまっている舞が、ちらりと佳乃のほうを窺ってきた。

「いやいや、私の秘書の件は、どうとでもなります。高石さんは、このとおり若くて綺麗ですし……これからあちこち連れ歩くには彼女みたいに華やかな女性が好ましいと思いますよ。彼女自身、本城代表の秘書になるつもりで、いろいろと準備を……ねえ、高石さん」

「はい」

高石に同意を求められて、舞はにつこりと微笑んで本城を見た。その頬には、くつきりとしたえくぼが浮かんでいる。

いったい何が「はい」なのかはさておき、高石の持論には少々ムツときてしまった。確かに佳乃は舞よりも七つも年上だし、外見上見劣りするのとは否定しないが――

「私、本城代表のお役に立てるよう、精一杯頑張ります！」

舞が出した、いかにも芝居がかった声が部屋の中に響き渡る。それを聞いた高石は、満面の笑みを浮かべて頷いた。

「うん、頑張らなさい。ねえ、本城代表。高石さんもやる気十分ですし、いろいろと足りない部分はあるかもしれませんが、ここはひとつ社長の意向よりもご自身の英断で高石さんを秘書にしようと思ってくれないか」

おもねるような高石の声に、佳乃は密かに鳥肌を立てた。普段、部下に横柄な態度を取りがちな彼のそんな声を聞くのは、何年振りだろうか。

「いや、清水さんに秘書をお願いするのは、僕の意向でもあるんです。僕自身の英断で――とおつ

しやるなら、なおの事僕の秘書は清水さんをお願いしたい」

それまでにこやかに話していた本城が、一変して冷静沈着なビジネスマンの表情を見せた。

途端に高石が顔を歪める。

「しかしですね――」

「そもそも僕がこの会社に来たのは、これまでの経営を見直し将来に向けてさらなる躍進を遂げるためです。そのためには、いろいろと足りない部分があるかもしれない。秘書をそばに置く余裕などありません。僕が秘書に求めているのは、外見ではなく中身です」

本城に真正面から見つめられて、高石はたじろいで口ごもった。

「……しかし、人事部長の意向では――」

「人事の最終的な決定権は誰にあるか、ご存じですよね？」

そう言われて、高石はさすがに口をつぐむ。

高石と対峙する本城は、相手に有無を言わせないほどの圧倒的なオーラを放っていた。

あのときと同じだ――

五年前、はじめて会ったときの彼も、今と同じように一瞬で相手を黙らせて屈服させてしまった。ただし、当時と違い彼の顔に浮かぶ微笑みは驚くほどクールでビジネスライクだ。

「では、僕の秘書は清水さんで決まりですね。他に何か聞きたい事はありますか？」

本城は、いくぶん表情を和らげて高石のほうに身を乗り出した。

「あ……いえ、特に――」

「そうですか。では、それぞれの仕事に戻りましょう。——という事で、よろしく、清水さん。さつそくだが、君が社長に出したこれまでのデータを適当にまとめて僕に再提出してくれるかな？できれば、明日の午前中までにお願いしたい」

佳乃が社長秘書になつてから、今月でちょうど五年経った。

その間の膨大なデータを再提出する——しかも、適当にまとめて“という事は、それなりにデータを集積して整理してから出さなければならぬ。

「はい、承知しました。すぐとりかかります」

佳乃が即答すると、本城は満足そうに頷いてソファから立ち上がった。

置いてきぼり状態だった高石は、どうにも納得がいけないといった表情を浮かべながらそれに倣う。そして、隣にいる舞を急ぎ立てるようにして部屋の入口に向かった。佳乃の横を通り過ぎた舞は、あからさまに不満そうな表情を浮かべている。

それを見た佳乃は、昨日ロッカー室で聞いた舞のお喋りを思い出した。

『まだ内緒なんだけど、本城代表の秘書は、私よ。パパ——じゃなくて、副社長が人事部長と話し合いをしてそう決めたみたい』

二人の様子を見る限り、まさか本城に断られるとは思ってもいなかったのだろう。

佳乃とて、まさか自分が本城の秘書になるとは思っていなかった。彼とは二度と個人的な接触を持つまいと誓い、会社でも極力近づかないで済むよう努力するつもりだった。しかし、専属の秘書ともなると、少なくとも仕事中は頭の中から彼を追い出せなくなる。

ものすごく憂鬱だし、悪い予感しかしない。けれど、村井の意向でもあるのなら、割り切つて秘書としての業務を全うするしかないだろう。

佳乃は、そう自分を奮い立たせる。ただひとつ気がかりなのは、これをきっかけに舞の態度が悪化するのではないかという事だ。

副社長の娘だからといって、佳乃は舞を特別視した事はない。しかし、舞のほうはそれが不満であるらしく、普段から何かにつけて佳乃に反抗的な態度をとっていた。

自席に戻ると、案の定先に戻っているはずの舞の姿がない。彼女の行動パターンから推測するに、たぶんあのまま高石の執務室に向かったのだろう。

(やれやれ……。ただでさえ、しょっちゅう席を外してるのに)

佳乃は必要なデータの抽出をはじめながら、舞がこれからするはずだったルーチン業務について考えた。担当する役員がいるとはいえ、秘書がやらなければならぬ仕事は他にも多くある。一見華やかに見える秘書という仕事だけど、実のところそのほとんどが、縁の下の力持ち的な地味で目立たない雑務で占められているのだ。

もちろん、ただ坦々と与えられた仕事をこなすだけではないけない。何をやるにしても、常にプロフェッショナルとしての自覚を持ち、一度請け負った仕事は最後まで責任を持ってやり遂げる。

それに加えて、常時関連業界の情報にアンテナを張り、何事においてもたえず一歩先を行く努力が必須なのだ。

少なくとも「七和コーポレーション」での秘書業務はそうだし、だからこそ日々緊張感とモチ

ペーシオンを保ちながら仕事に励む事ができる。

(いくら何でも、こう頻繁に自由行動をとられるときさすがに困るな……)

舞が副社長の専属秘書になって以来、秘書課ではある種独特の緊張感が常に存在している。

それは、舞が仕事でミスを頻発するから。そして、彼女のミスのほとんどを副社長自らがフォローして、あわよくばそれを隠蔽しようとするからだ。

それで事なきを得るならまだしも、彼女のミスの影響が他の役員に及ぶ事が少なくない。そのたびに、佳乃は事態の收拾に奔走し、結構な尻拭いをさせられていた。

そんな状態がずっと続いていたところに、今回の代表取締役CEOの秘書騒ぎだ。

きつと舞は、今回のゴリ押し人事の失敗で、相当頭に血が上っている事だろう。そうでなくても、徐々にエスカレートしている舞のわがままぶりには、高石ですら手を焼いている様子だ。

いい加減、舞の勤務態度についてはどうにかしなければならなかった。

しかし、自分の立場ではやれる事が限られているし、課を取り仕切る立場の丸越もあてにはならない。

それを不甲斐なく思うものの、今の体制でもどうにも解決策が見つかりそうもなかった。

そして、この件が解決しない限りは、和氣藹々とした秘書課など望むべくもないと考えている。

(はあ……本城代表の秘書か……)

正直言つて、彼の秘書になどなりたくはない。むしろまっぴらごめんだし、今後の展開を思うと鬱々とした気分になる。

しかし、それはあくまで個人的な見解であり、会社の今後や自身のキャリアアップを思えば積極的に喜ぶべき人事なのだろう。

これまで海外で活躍していた彼の事だ。一緒に仕事をするだけでも視野が広がりそうだし、いろいろと勉強になるに違いない。

それに、村井がいない今、高石のストッパー役になってくれそうな人間とは、できる限り連携を取っておきたい。もつとも、村井に招かれたのだから彼と同じ考えを持っていると考えるのは早計だろうが……

その事も踏まえて、本城の動向を自然と窺える立場になれたのは幸いだったと思う。

(ここは素直に喜んでおくべきだね？ まさかオフィスで、公私混同したりしないだろうし……)

途中、持ち込まれる業務をこなしながら、ランチタイムを挟み、本城に頼まれた作業を続けた。

「清水主任、何かお手伝いする事はありますか？」

隣席から岡が声をかけてきた。

彼女が担当する佐伯常務取締役経営企画部長は、昨日から出張に出かけている。彼はとても几帳面で日頃から秘書の手を煩わせる事がほとんどない。それはそれでありがたい事だが、岡にしてみれば少々手持無沙汰のようだった。

「ううん、今のところは大丈夫。ありがとう」

佳乃は岡の気遣いに、小さく微笑んだ。

「もし何かあれば、いつでも遠慮なく言ってください。清水主任、ただでさえ忙しいんですから」

本城の秘書になった事は、あのあとすぐに課長から皆に伝えられた。その場にいた全員が納得したような表情を浮かべると同時に、一部では佳乃の業務量を心配する声も上がっていたのだ。

「うん、ありがとう。そのときはお願いするわね」

「はい、本当にそうしてください」

佳乃は頷いて、さらに口元をほころばせた。

岡の事務処理能力は信用している。それに、後輩を育てると言う意味ではもつと下に仕事を回したほうがいいのだろう。

(わかってるんだけどなあ……。ほんと、私ったら、頼むのがヘタだよね……)

秘書課主任として、積極的且つタイミングよく部下に仕事を任せる——それを役職者としての今後の課題にしたほうがいいかもしれない。そう思いながらも、結局一人フル稼働で仕事を完結させてしまった。

(はい、完了……つと)

佳乃は必要なファイルを作成し終えて、ロック機能付きの社内共有フォルダーへ保存する。

頼まれてからものの四時間でデータを完成できたのは、新しくCEOが就任すると聞いてから、あらかじめ必要になるだろう仕事を予測していたからだ。

仕事が速いと定評がある佳乃だけど、そのノウハウを教えてくれたのが村井だった。

社長でありながら少しも驕る事なく、何が起きてても常に平常心を保っている。そんな彼の事を、佳乃は上司としてだけではなく、一人の人間として心から尊敬していた。

できる事なら、一日も早く職場復帰してほしい。しかし、いくら顔色がよくなったとはいえ、まだ健康状態は安定しておらず、早期退院の可能性は低い。

プログラムを終わらせると、佳乃は本城に内線を入れるべく受話器に指をかけた。

彼に連絡をするというだけで必要以上に緊張してしまい、我ながら嫌になる。

以前の会社と合わせて八年間も秘書をしているのに、感情のコントロールすらできなくてどうするのだ。

(何やってんの、佳乃。もつとしっかりして！)

佳乃は自分にはつばをかけ、深呼吸をした。

どうにか平静を取り戻したところで受話器を取り、本城に内線を入れる。

『はい、本城です』

ツーコールあとに聞こえてきた彼の声が、佳乃の耳の奥で響く。

ああ、こんなにいい声だっただろうか？

そう思ってしまうほど、本城の声がじんわりと鼓膜に溶け込んで聴覚を刺激してくる。

「お疲れ様です。秘書課の清水です。データの取りまとめが終わりました。お渡ししておきたい書類もあるのですが、今からお持ちしてもよろしいでしょうか？」

強いて平常心を保ち、意識して若干低いトーンで話をする。すると、思っていた以上に事務的な喋り方になってしまった。

『ああ、いいよ。っていうか、もうできたの？ さすが社長お墨付きの敏腕秘書だ。書類はどのく

「らいあるのかな？ たくさんあるようなら、運ぶのを手伝うけど？」

朝とは打って変わった親しげな口調に、一瞬戸惑う。

「いえ、私一人で大丈夫です。では、今からお伺いします」

『そう？ じゃあ、待ってる』

通話を終えた途端、佳乃は眉間に縦皺たてしわを寄せた。

やはり、明らかにこれまでと声のトーンが違う。それに、やけに馴れ馴れしい。

内線での通話とはいえ、オフィスでの発言は公的なものだ。少なくとも、午前中の彼はそういった事をわきまえた振る舞いをしていたように思う。それなのに、いくら周りに誰もいないからといって、いきなりタメ口はいかがなものだろう。

（いや、ここでイライラしちゃダメでしょ）

佳乃は立ち上がり、デスク横に置いた台車のハンドルを握った。岡に一声かけて、段ボール箱を二個載せた台車をゆつくりと押しはじめる。

（それにしたって、あの変わりようは何なの？）

秘書の経験上、コロコロと態度を変えるお偉方には、ある程度慣れっこになっている。しかし、あんなふうにいきなり口調を変えて、距離を詰めてこられたのははじめてだった。

いったいどういうつもりなのだろう？

そんな事を思いながら歩いていると、ついさつき消えた眉間の皺しわが、いつの間にか復活していた。

（おっと……平常心、平常心……）

本城の執務室の前に到着し、ドアの前に立つ。ノックする前に、大きく目を見開いて思いっきり口角を上げる。凝り固まっていた表情筋が柔らかくなったところで、ノックしようと右手を上げた途端、勢いよくドアが開き本城と鉢合わせになった。

「うお、びっくりした！ ……って、どうしたの？ すごい笑顔だけど」

しまった、と思ったけれど時すでに遅し。

彼は佳乃の全力の作り笑顔を見て、笑いを堪こらえている。

「くっ……。いや、失敬。君が笑顔でここに来てくれてなによりだ」

本城が台車のハンドルをとって中に移動させる。

「あ……す、すみません、ありがとうございます」

とっさに礼を言い、その場に立ち尽くす。

本城も驚いただろうが、佳乃だっていきなり目の前に現れた彼のドアアップにびっくりした。

台車の中に運び終えた本城は、佳乃を部屋に招き入れるなり、部屋の外に首を出して辺りを窺うかがうような動きをする。

不思議に思っで見ていると、彼は素早くドアを閉めて佳乃の背をドアに押し付けた。その上、顔

の両側に手をつけて逃げられなくしてくる。

「ちよっ……何のつもりですか？」

不意打ちを食らって、佳乃はさすがにうろたえて目を瞬しげかせる。

「ああ、長かった。やっとだ……ようやく君と二人きりになった」

こちらを覗き込んでくる本城の顔には、またしても不遜なほどセクシーな微笑みが浮かんでいる。まるで心臓を鷲掴みにされたようになり、佳乃は声も出せず彼の瞳を見つめ返す。

脳天が熱くなり、頭の中でけたたましく警鐘が鳴りはじめた。

このままではいけない――

すぐさま秘書としての自分を取り戻した佳乃は、直立の姿勢を保ったまま素早く下に沈み込んで本城の腕から脱出した。

「おっと――君はなかなかすばしっこいね。油断すると、すぐに僕の前からいなくなる。そういうところ、五年前と同じだ」

あからさまな嫌味を言いながら微笑んだ顔が、憎らしいほど魅力的だ。

「だけど、そういった行動は今後、改めてもらいたいな。そうじゃなきゃ、こっちとしても逃げられないように対策を講じる必要がでてくる」

「は？ た……対策って何ですか」

努めて冷静さを保ちながら、質問を投げかける。

「まあ、いろいろと種類があるよね。身体的な拘束や、心理的な掌握。僕もあれから個人的に心理学を学んだりしてみたんだ。特に『人心掌握術』ってやつが興味深かったな。人の心をガッツリと掴んで、自分の意のままに操作する――すごく魅力的に聞こえるだろ？」

饒舌に喋る本城の顔が、少しずつ近づいてくる。

「どう、試してみない？」

「申し訳ありませんが、お断りします」

自分でも驚くほど、きっぱりと拒絶していた。

『『人心掌握術』は知っています。ビジネスをする上で活かせれば、とても有益だと思います。ですが、その実験台を探していらっしゃるのなら、他をあたってください』

「やだ。君じゃなきゃ意味がないから」

即断され、さらにじりじりと距離を縮められる。

さっきからの本城の言動は、およそ上司としてふさわしくないものだ。佳乃は彼が近づいてきただけ、後ずさって距離を保つ。高まりつつある緊張感のせいか、背筋がぞわぞわする。

（落ち着いて、佳乃……。大丈夫、あなたは秘書で、この人はただの上司。それにここは、神聖なおフィスなんだから……）

そう思いながらも、心臓がバクバクするのを抑える事ができない。

本城が、大きく一步近づいてきた。思わず仰け反りそうになりながらも、佳乃は小さく深呼吸をして自分を落ち着かせる。

「いったい、どういうつもりでこんな事をなさるんですか？」

佳乃は、できる限り低くはつきりとした声で話すよう心掛けながら、本城を睨みつけた。

「どういうつもりかって？ それはまた、ずいぶんと漠然とした質問だね。うーん、逆に聞くけど、君はどう思う？ 僕が今どんな気持ちか……。それに、どうして今になって君の前に現れたか。当たたら褒美にいいものをあげるよ」